

教職コンソーシアム通信

学びの架け橋



人にまっすぐ。
大阪教育大学

01 大教大キューピッド

02 リレーエッセイ

03 交流事業の紹介

05 加盟校出身学生・卒業生の紹介

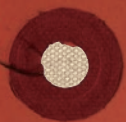
06 加盟校の取り組み紹介

07 大学トピックス／編集後記

母校と大阪教育大学をつなぐ 「大教大キューピッド」

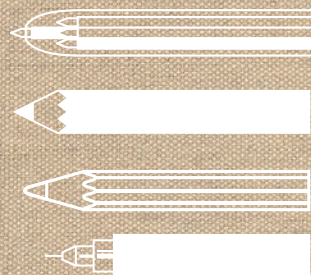
学生が大学と出身高校をつなぐプロジェクト「大教大キューピッド」。新しい仲間も加わって、大教大や教師の魅力を皆さんに伝えにいきます。





RELAY ESSAY

リレーエッセイ



人との出会いが人を育てる

大阪府立吹田東高等学校 佐々木 啓

私は、吹田で生まれ、吹田で育ちました。自然に恵まれ、子どもの遊び場に困らない、それでいてニュータウンや万博など、近未来的な雰囲気のあるところでした。習字、ピアノ、カブスカウト、友人との外遊び、そして読書に明け暮れた小学校生活。小学校6年生で塾に通いだしてから、習い事をやめてしまったため、習字とピアノを「ものにできなかった」のが残念です。続けてさえいけば、校長になってから、毛筆サインを練習する必要もなかったですから。

高校に入学してからは、手当たり次第に本を読みました。1日に3冊ペースで乱読していたこともあります。その後、様々な思いから11ヶ月で退学し、あらためて府立茨木高校に入学しました。このことが私の人生を決定づけることになりました。

合格者発表後に2日間の新入生オリエンテーションがありました。びっくりしたことに、教員ではなく生徒が全てを取り仕切っていました。クラス発表、学校生活、クラブ、勉強について伝えてくれる先輩の姿に、驚きというより感動を覚えました。生徒会長が、「生徒会は君たちの参加を待っています」と話されたとき、私は生徒会に入ろうと決心しました。

入学式後、生徒会執行部に入るとすぐに、体育祭と文化祭の準備が始まりました。日々、新たな発見、課題があります。どうすればいいのかを考えていく中、生徒会顧問の藤本先生は、いつも横にいらっしゃいました。「生徒たちの思いを先生方に伝え、先生方の考えを生徒たちに伝える」といった単なるメッセージではなく、生徒たちが力を発揮できるよう、生徒と一緒に動き、他の先生方を巻き込んでくださいました。穏やかでいつも暖かく生徒を見守り、生徒たちが力を出すことができるように考えてくださっている。そんな姿を見て、私の心に教員になるという夢が芽生えてきました。

また、生徒会で遅くまで話し合っているときに、扉を開けて顔をのぞかせ「がんばってるな」と声をかけて下さった中西校長先生。校長先生が生徒会を見てくださっている。その時の嬉しさは今でも忘れられません。

お二人にお会いしたことで、私は教員をめざすようになりました。今でも、お二人がどんな思いで教員をなさっ

ていたのかを伺い、私の思いも聞いていただきたかったと思っています。

たくさんの個性豊かな先生方、生徒会や部活動の仲間、夢を語り合ったクラスメイト、非常に恵まれた高校生活でした。自由に自分たちがやりたいことをやれる。こんな素晴らしい高校生活を後輩たちにも経験させたい。そのために、自分は教師になって生徒会担当をするのだと決めました。

大学卒業と同時に、念願の大阪府立高校の教員になりました。しかも、生徒指導部生徒会係です。私自身驚きました。いきなり夢が叶ったのです。ですが、現実はその甘いものではありませんでした。動かない生徒や、反対する教員、それにも負けず、地道に取組を進めていく生徒会の先生たち。私が生徒会に関わりたと思ったのは、生徒としての感覚であって、教員としてではなかったと思い知らされました。それでも先輩教員の姿に学び、徐々に先生らしくなってきたと思います。自分も楽しかったのですが、生徒たちの嬉しそうな顔を見たときが一番です。後夜祭の後、キャンプファイヤーの火が小さくなる中、私の肩で「執行部やって良かった」と泣いていたT君。私も涙をこらえることができませんでした。教員になって良かったと心から思いました。

もちろん、こんなことは滅多にありません。逆に、眠れないこともたくさんありました。それでも、周りの教員と生徒、家族に支えられ、今に至っています。

教師には、想像力が必要です。生徒・保護者の気持ちを酌むこと、先の見通しを立てること、私は、読書と先輩からそれを学びました。

人を育てながら、自分も成長していくのが教員です。皆さん、人との出会いを大切に自分の未来を作り上げてください。そして、生徒を伸ばす教員となってください。



佐々木 啓 ささき けい
大阪府立吹田東高等学校校長



教師をめざす高校生対象特別プログラム 「教師にまっすぐ」

教師をめざす高校生が、志をより確かなものにするためのプログラム「教師にまっすぐ」を7月から8月にかけて実施し、91名が受講しました。「府立高校教職コンソーシアム」加盟校の1、2年生を対象に実施するもので4年目となる取り組みです。

第1回は、天王寺キャンパスでの開講式ののち、早速班に分かれて「先生の仕事」「魅力ある先生」についてグループワークを行いました。午後からは、元府立高校長の川端康之入試課特別参与による講義「教員養成大学で学ぶことの意味」に熱心に耳を傾けたあと、本学教職大学院や学部の学生らとともに、「教育を考える①正解のない問に挑む」として、「なぜ学校で学ぶのか?」というテーマでのグループワークに取り組み、最後に各班の成果を発表しました。

第2回はオープンキャンパスに参加しました。大学の授業概要などについて特別講義を受けたあと、専攻別説明会や模擬授業を受講し、最後に模擬授業の感想を発表しました。

第3回は、課題研究「教育を考える」で、受講生たち

は6つの講座に分かれて「情報収集」「分析・整理」「まとめ・表現」を経て結論に導くというグループワークを行いました。

「黒部川扇状地はどうして河口にあるのか?」のグループでは、デジタル地図を利用して、社会科教科書と現実の世界の違いについて考え、教科書を書き換えることに挑戦しました。「君も彫刻家、1トンの粘土と格闘だ!」のグループでは、実際に1トンの粘土という素材に向き合い創造をすることで造形活動の可能性や意味について考えるなど、受講生はこれら講座ごとに異なる様々な課題に向き合いました。

最後に行われた全体での研究発表会で、受講生たちはそれぞれの学びと成果を共有し、「教師という仕事は、単に子どものことが好きということだけでなく、子どもたちが学び成長できるような授業をするためには、具体的にどのような準備をしなければいけないのか知ることができた」「教育学に、より一層の興味を持つようになった」などの感想を寄せました。



開講式の様子



魅力ある先生とは何か、グループワークに真剣に取り組む



社会の講座でデジタル地図で実際の地形を確認して分析を進める



美術の講座で実際に1トンの粘土から作品を制作する様子



交流事業の紹介

EXCHANGE PROGRAMMES

「教師の学び舎」第10クールを開催

「新学習指導要領の着実な実施へ向けて」をテーマに、「教師の学び舎」第10クールを6月から8月にかけて3回にわたり開講し、35人が受講しました。

「教師の学び舎」は、府立高校教職コンソーシアム加盟校及び大阪府内の公立高校の教員を対象に、授業力向上や生徒指導、ICT教育など様々なテーマの講義を提供しています。

第10クールは、各回で講師が変わるオムニバス形式で実施しました。峯明秀教授(大学院連合教職実践研究科副主任)が「学校で「探究活動」を効果的に進めるために」、森実教授(教職教育研究センター)が「ダイバーシティと人権の教育」、柏木賀津子教授(大学院連合教職実践研究科)と田中満公子特任教授(大学院連合教職実践研究科)が「グローバル時代の教師を育てる」と題して講義しました。

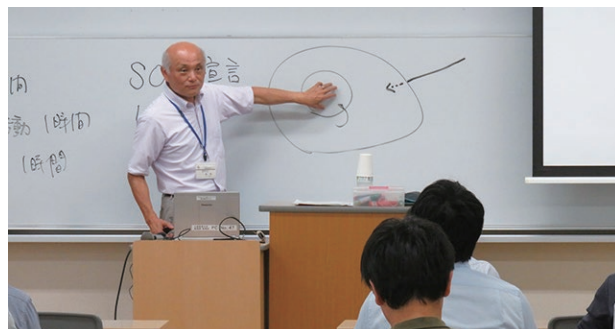
峯明秀教授は、学習効果を高めるために意識的な工夫を凝らすことが、学習の実感や手応えを促し、「できそうだ」という自己効力感を高めることを解説し、探求学習の実践事例を紹介しました。森教授は、自分に関する情報を主として言葉で他者に伝える「自己開示」、社会的に不利な要素を含む自分についての情報

を他者に伝える「カミングアウト」をテーマに、受講生が自己の状況を踏まえて意見交換を行い、子どもの実態に応じて人権学習のプログラムを組み立てる原理を説明しました。柏木教授は、自身がユバスキュラ大学(フィンランド)で客員研究員としてフィンランドの英語教育やスクールリーダーについて研究している経験を踏まえ、フィンランドと日本の教育の類似と相違について触れながら、日本の教育への応用として、教科連携(CLIL)の具体例を提案しました。田中特任教授の講義では、受講生は「グローバルな企画をデザインする」というテーマのワークショップに取り組み、企画の目的や当日(現地)の具体的な取組みについてグループで考えました。

参加者からは「生徒の学習意欲を高めていくには、単に頑張れと励ますのではなく、なぜ頑張らないといけないのかを生徒自身で自己決定させることが重要だと感じた」「カミングアウトする側も受け止める側も、なぜその話をするのかコミュニケーションを図り、目的や意図を確認する必要があると感じた」「日本の教育の得意分野や課題がわかりやすく理解でき、また高校生が社会を身近に感じるような教科連携の進め方のヒントになった」などの感想が寄せられました。



峯教授の講義



森教授の講義



柏木教授の講義



田中特任教授の講義

加盟校出身学生・卒業生の紹介



かわぐち りょう

川口 諒 さん

学校教育教員養成課程特別支援教育専攻2回生
四條畷高等学校2017年度卒

—高校時代の思い出は？

文化祭や体育祭などの行事とても楽しかったのですが、日々の学校生活も楽しかったです。友だちと話をしたり、部活(卓球部)に励んだりしていました。当時は勉強に部活に、そして行事ごとに忙しかったけど、今ではいい思い出です。

—特別支援学校教諭をめざしたきっかけは？

初めは小学校免許が取れたらどこでもいいと、安易に考えていました。しかしある日、テレビで障害のある子どもへの教育の重要性が取り上げられていて、そこで特別支援学校教諭を目指そうと決心しました。

—特別支援教育専攻のいいところは？

他大学の特別支援教育専攻だと、知的障害・肢体不自由・病弱の勉強しかできないことがありますが、大阪教育大学では上記の3つの領域に加え、聴覚障害・視覚障害の合計5つの領域、そしてさらに近年注目されている発達障害の勉強もすることができます。また大学の教員の中には、かつて学校現場にいた方もいるので、教育現場についても深く学ぶことができるのも、いいところです。学生一人ひとりの特別支援教育に対する意識も高いので、モチベーションも上がります。

—大学生活で頑張っていること、楽しいことは？

普段の講義です(笑)。今まで知らなかったことを勉強するので面白いですね。また学生同士のディスカッションでは、いろんな考え方に触れることができるので楽しいですし、講義の中で論文を読むこともあり、たくさんの知識を得ることができます。それから、大学の先生と意見交流するのも楽しいですよ。今まで自分の考えたこともなかったことに触れることができるので、より深く学ぶことができます。

—おすすめの勉強法は？

大学受験の時は、高校で扱った教材や、自分で買った問題集を何回も解いていました。もちろんいろんな問題に触れるのも大事だと思いますが、まずは1問1問しっかり解けるようになることも大事だと思っていたので、何度も解いていました。僕が受けた特別支援教育専攻は二次試験が小論文だったので、先生に添削指導をしてもらいました。あまり小論文を書く機会はないと思います。まずは小論文を書いて、それから添削してもらって、徐々に小論文に慣れていくよう頑張ってください。

—大教大のいいところ

教員養成課程に所属している学生は教育現場に触れる機会が多いです。1回生から学校に訪問し、実際にどのような教育が施されているのか観察をする機会があります。2回生では学校インターンシップ、3回生では教育実習もあります。大学の講義では得られないものを習得できるので、いい経験になります。

—大学生生活を有意義に過ごすには？

好奇心を持つこと、ですかね。少し稚拙な表現ですが、大学生である間は自分の興味を持ったことに取り組むことができますし、大学の先生方は研究のプロですから助言等をもらうことができると思います。僕は視覚に障害のある子どもたちや学習に困難を示す子どもたちの学習方法に興味を持ち、今は教材の再編集をするボランティア活動をしています。先生方や先輩方のアドバイスを頂きながら頑張っています。



みなみがわ めい

南川 芽 さん

グローバル教育専攻 英語コミュニケーションコース2回生
和泉高等学校2017年度卒

—高校時代の思い出は？

修学旅行でシンガポールに行ったことです。海外に行くのは初めてだったので、全てが新鮮でとても楽しかったのを覚えています。修学旅行のさまざまな体験を経て、もっと異文化に触れてみたいと思うようになりました。

—英語教員をめざしたきっかけは？

中学の頃、英語の定期テストで良い点数を取れた、という単純な理由です。そこから英語に興味を持ち始め、高校も英語に力を入れている学校を受験しました。楽しく、わかりやすい授業を行うことで、英語が楽しいものであるという事を、授業を通して実感させることができるようになりたいです。

—グローバル教育専攻 英語コミュニケーションコースのいいところは？

少人数なので、皆で助け合いながら学習ができることです。皆が英語を学びたいという向上心を持っているので、学生同士でお互いに刺激を受けることができるのは、英語コミュニケーションコースの良いところだと思います。

—クラブ・サークルは何をやっていますか？

私は、LOVE ALLという卓球サークルに入っています。サークルといっても時には週に3回ほど練習しているときもあります。ただし、自分の都合によって参加するかどうかは自由に決めることができるので、自分の予定が合うときに参加するようにしています。また、LOVE ALLのメンバーは本当に仲が良く、普通の練習や、行事の時にも皆で楽しく活動して

います。

—おすすめの勉強法は？

大学受験では、ストレスをためないように勉強することを心がけていました。テレビを見たいときは我慢せずに見るようにし、眠たい時にはすぐに寝るなど、なるべくしたいことをするようにしていました。そうすることで、勉強に取り掛かる時には、集中力が高まると思います。

—大教大のいいところは？

春になるとたくさんの桜が咲いてとてもきれいだし、秋にはとてもきれいな紅葉を見ることができます。広大なキャンパスで、それぞれの季節の良さを感じながら勉強や部活に打ち込めることは、大教大ならではの良いところだと思います。それと、教員をめざしている学生が多いということです。障害や教育についての熱意を持って入学する学生が多いので、勉強したり経験を積んだりする上で良い刺激になっています。もう少し先の事ですが、教員採用試験対策に力を入れて取り組んでいるところも安心できます。

—大学生生活を有意義に過ごすには？

春休みや夏休みなどの長期休暇を使って自己啓発に努めるだけでなく、リフレッシュすることは大事だと思います。授業があるときは、課題やアルバイトなどに時間を使うため、自由な時間はほとんどありません。長期休暇には時間があるので、私はそのタイミングに自分が興味のあることを取り組むようにしています。例えば、旅行をすることにより色々な考え方や物の見方を体験したり、英語の勉強をしたりしています。





加盟校の取り組み紹介

MEMBER HIGH SCHOOLS' PROGRAMMES

大阪府立池田高等学校

本校は、昭和15年(1940年)に16番目の旧制中学校として設立され、翌16年に現在の敷地に移転、戦後の学制改革を経て、その後大阪府立池田高等学校と改称。2020年(東京オリンピック・パラリンピック開催の年)には、創立80周年を迎える伝統ある学校です。



「自主・自律」をモットーとする『承風魂』を継承しながらも、伝統を守ることとは変化し続けること!を忘れずに、日々の教育活動に取り組んでいます。

ICT機器の活用と朝読 ……………

本校は、全日制普通科高校であり、生徒たちが「学習・学校行事・部活動」に自主的かつ熱心に取り組む3年間を過ごし、更なる学習の機会を得た進学先へと羽ばたく気持ちで巣立っていきます。日々の学校生活で1番多くの時間を費やす「学習(授業)」では、平成25年度(2013年)より全普通教室にプロジェクターを設置してICTを活用した授業が実践できる教育環境が整備されています。また、毎朝始業前の10分間を活用した朝の読書(朝読)を平成27年度(2015年)より導入し、読書習慣が身に付くことは勿論のこと、1時間目の授業に向けて集中できる有意義な時間となっています。

月曜日と水曜日は7時間授業、土曜日には3年生は特別講習、2年生と1年生は午前中の部活動を停止として、講習や自宅での課題学習を行い、ほぼ生徒全員が大学進学をめざす本校の学習体制を確立しています。



自学自習の支援「池高ラボ」……………

ここ数年、在籍生徒数が1,100名を超えている本校ですが、伝統校という古さから教室の数にゆとりはなく生徒たちの自学自習のスペース確保が難しい現状です。道路を隔てた敷地にある同窓会館(承風会館)を自習室として開放していましたが、危機管理上の不安があることや図書室の自習スペースも広くないこと等を考慮

して、平成30年度(2018年)に、本館と中館をつなぐ少し広い渡り廊下に自学自習スペース「池高ラボ」を整備しました。2人から6人まで同時に使用できる机&椅子の配置、間仕切りはすべてホワイトボード、職員室にも近い場所であり、考査前などは卒業生がチューターとして学習支援もしてくれています。暑さ、寒さの対策は今後の課題ではありますが、生徒たちには、なかなか好評です。



活力溢れる人材育成……………

部活動への入部率が高く、ほとんどの生徒が放課後は部活動に取り組んでいます。本校は、「中学校タッチフットボール・高等学校アメリカンフットボール発祥の地」であり、正門を入ってすぐ左手に石碑があり、アメフト部も活発に活動しています。

部活動を通して、忍耐力や団結力、他者を思いやる心を育むと同時に、限られた時間で有意義な活動をするための「自らが考える力」も身につけるよう努めています。

また、主に1年生の希望者が参加する夏休みに2週間の体験をするオーストラリア語学研修や、令和元年度(2019年)から本校で実施する5日間のイングリッシュ・キャンプ、JICAから派遣された青年海外協力隊の帰国隊員を招いた講演、地域の国際交流センターとの連携など、グローバルな視点の育成にも取り組んでいます。

体育祭や文化祭(承風祭)などの学校行事の運営の中心は「自治会執行部」です。執行部の運営に在校生

は協働しています。執行部は、学校掲示板で季節感のある広報活動も担当しています。



林野庁・環境省が主催する 山の日PRイベント

林野庁・環境省が主催する山の日PRイベント「七夕企画 山に親しみ 星に願いを2019」が、近畿中国森林管理局で開催され、およそ200人が訪れました。本学教員と学生らによる大教大ブースでは子ども向けのワークショップを行いました。

理科教育講座の生田享介准教授、理数情報講座の乾陽子准教授率いる学生らのグループであるDIT（大教生き物チーム）のブースでは、モリチャバネゴキブリやワラジムシの観察や、実際に触れる体験に子どもたちが歓声を上げて楽しみました。美術教育講座の加藤可奈衛教授、渡邊美香准教授、青木宏子特任准教授と学生らのブースでは、七夕にちなんだ星のオーナメントづくりを行い、世界にたったひとつの作品を作ろうと子どもだけでなく大人も真剣に製作している様子が見られました。

参加者からは、「学生さんが丁寧に説明して下さり、子どもたちにとって普段できない体験ができ勉強になった」との声が寄せられました。



附属平野小で学生らが 財政教育実践授業を実施

本学の学生・教職大学院生が、本学附属平野小学校の6年生105人を対象に財政教育の実践授業を行いました。同校では5年前、義務教育段階における財務省の「財政教育プログラム」が全国で初めて実施されました。このプログラムは、日本の財政の現状を知り、財源の確保や配分の問題にどのように取り組むべきか、子どもたちに自身の将来に関わる問題として考えてもらうものです。今回は、本学の教員志望の学生が講師になり、授業が展開されました。児童らは、もし日本が100人の村だったとしたら100万円をどのように配分するのかをグループで考え、Excelを使いながら予算配分しました。

授業は、社会保障や公共事業などについて考える難しいテーマでもありましたが、参加した児童からは、「これまであまり慣れ親しんでこなかった財政を専門的に学べてよかった。私たちが真剣に考えていかなければならない問題だと感じた」「今日学んだことを家でも話したい」などの感想が寄せられました。



編集後記

先日、息子が店でストローを断ったので理由を聞くと、太平洋ゴミベルト、鼻にストローが刺さったウミガメのニュース等を見て、ずっとそうしているとのこと。大好きだったペットの亀が天国へ行って1年、無関係に思えません。将来海洋系を目指す夢もその時、初めて聞きました。無気力思春期反抗期に絶賛辟易中の母にとって、意識的に何かをする息子の姿はそれだけで新鮮でした。

ふと、「人は好きな人からしか学ばない」ある方から聞いた言葉を思い出しました。教師の仕事や子どもたちのことが「大好き」な先生から、先生や学校が「大好き」な子どもたちが色んなことを学び、みんなが「好きなこと」に向かって生き生きと成長し続ける。学校がそんなきっかけであふれる場所であり続けてほしいなとしみじみ思いました。 (K)

大阪教育大学のSNSアカウント



公式Twitter

@OsakaKyoikuUniv



公式Facebook

<https://www.facebook.com/OsakaKyoikuUniv>



公式Instagram

@osakakyoikuuniv

イベント情報やニュースなど、大教大の「今」を発信しています。ぜひフォローしてください。